

第28回 ('17)

書学書道史学会大会

於：日本大学文理学部キャンパス

(3号館 3505教室)

11/25 sat.

13:00~	受付開始
13:30~14:30	開会式・総会 研究発表
14:40~15:10	①高橋 佑太
15:10~15:40	②高木 義隆
15:40~16:10	③三井 忠大 講演会
16:20~17:50	辻 勝美氏
18:00~19:30	懇親会

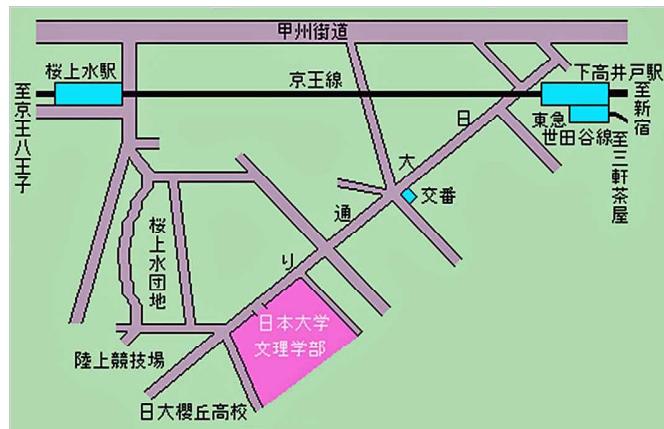


11/26 sun.

09:00~	受付開始
	研究発表
09:30~10:00	④剣持 翔伍
10:00~10:30	⑤関 俊史
10:30~11:00	⑥中村 健太郎
11:00~11:10	休憩
11:10~11:40	⑦成田 健太郎
11:40~12:10	⑧高城 弘一
12:10~12:20	閉会式
12:20~	写真撮影、特別観覧
15:00~	都内美術館・博物館鑑賞会

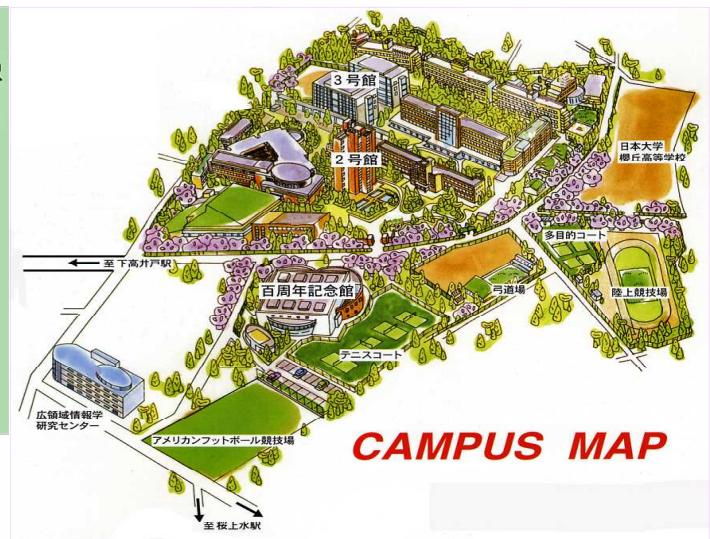
本年度大会会場の日本大学文理学部へのアクセスは、下記のとおりです。

アクセスマップ



住所：〒156-8550 東京都世田谷区桜上水3-25-40

キャンパスマップ



○当印刷物は、大会当日にお持ちください。

○カラー版は、ホームページで確認できます。

○大会用ポスターのデータをホームページにアップします。

必要に応じてプリントアウトし、関係各所にご掲示ください。

書学書道史学会

ASSOCIATION FOR CALLIGRAPHIC STUDIES

<http://shogaku-shodoushi.org/>

大会関係各種連絡事項

- 大会参加申込みは、必ず同封の「大会出欠確認はがき」に必要事項をご記入の上、11月15日（水）必着でご投函をお願いします。
- 理事・監事・諮問委員各位においては、必ず同封の「大会出欠確認はがき」にて理事会出欠のご回答をお願いします。幹事各位においても、同様に資料封入作業の出欠のご回答をお願いします。いずれも、昼食準備数を把握する関係上、ご回答にご協力ください。
- 幹事各位には、資料封入作業のほか、受付や大会運営のご協力をお願いしていますので、ご承知おきください。
- 大会参加費（資料代含む）・懇親会費は、同封の「払込取扱票」に□し、11月15日（水）までに納入してください。念のため、振込控えは大会当日にお持ちください。
- 本学会大会では、会員の方が非会員の同伴参加を認めています。「大会出欠確認はがき」および「払込取扱票」にその旨（氏名・人数等）を明記の上、「払込取扱票」にて会員ご自身と同伴非会員との額を合算してお振込みください。ただし、会員1名につき、同伴非会員1名が無料です。
- 大会参加費は、会員 2,000円、学生会員 無料です。ただし、会員1名につき、同伴非会員1名が無料で、それを超える場合、同伴非会員一般は1名につき 3,000円、同伴非会員学生は1名につき 1,000円の大会参加費が必要です。（※大会参加費を減額しました。奮ってご参加ください。）
- 懇親会参加費は、会員 4,000円（同伴非会員一般も同額）、学生会員 2,000円（同伴非会員学生も同額）です。
- 25日（土）の講演会、および26日（日）の都内美術館・博物館鑑賞会は、事前の申込みが不要で聴講無料です（都内美術館・博物館鑑賞会は入館料が別途必要となります）。非会員や学生にも周知の上、お勧めください。

会員	大会参加	懇親会参加	計
一般	○	○	6,000円
	○	×	2,000円
学生	○	○	2,000円
	○	×	0円

同伴非会員	大会参加	懇親会参加	計
一般	○	○	7,000円
	○	×	3,000円
学生	○	○	3,000円
	○	×	1,000円

- 年会費未納の方は、「払込取扱票」に記載の未納分を合算して速やかにお振込みください。

○ 懇親会は、大会初日の25日（土）18:00より、学食（さくらホール）で行います。

○ 26日（日）の昼食については、昼食をご持参いただくな、駅周辺、商店街等の飲食店をご利用ください。

○ 宿泊ホテル等については、すでに会報でお知らせしたとおり、役員・会員ともに事務局では一切手配しません。

○ 大会当日の緊急連絡先は、事務局長・高城の携帯（090-9684-9782）とします。

第28回('17)書学書道史学会大会プログラム

今年度の大会は、11月25日（土）・26日（日）の両日、日本大学文理学部キャンパスにおいて開催します。日程の詳細が決まりましたので、ご案内申し上げます。研究発表に加え、講演会および都内美術館・博物館鑑賞会を企画いたしました。多数のご参加をお待ちしております。

〈日 程〉

【11月25日（土） 1日目】

- 11：00～12：50 理事会（3号館 3501教室）
 13：00～ 受付開始（3号館 3505教室前）
 13：30～14：30 開会式・総会（3号館 3505教室）
 14：40～16：10 研究発表（3号館 3505教室）
 ①14：40～15：10 「張祖翼『磊盦金石跋尾稿』初探」 高橋佑太（安田女子大学）【司会：河内利治】
 ②15：10～15：40 「定武本の諸問題と蘭亭序諸本」 高木義隆【司会：中村伸夫】
 ③15：40～16：10 「松田南溟が比田井天来へ宛てた書簡にみる古法に関する一考察」 三井忠大（大東文化大学大学院生）【司会：笠嶋忠幸】
 16：20～17：50 講演会（3号館 3505教室） ※聴講無料
 「兼好法師と書の道」 辻勝美氏（日本大学非常勤講師）
 18：00～19：30 懇親会（さくらホール）

【11月26日（日） 2日目】

- 09：00～ 受付開始（3号館 3505教室前）
 09：30～12：10 研究発表（3号館 3505教室）
 ④09：30～10：00 「唐代の碑誌にみる複数書体の混用」 剣持翔伍（筑波大学大学院生）【司会：小川博章】
 ⑤10：00～10：30 「庾肩吾『書品』における評価方法の淵源」 関俊史（早稲田大学大学院生）【司会：菅野智明】
 ⑥10：30～11：00 「十三世紀書写の真観本の特徴と装飾料紙」 中村健太郎（帝京大学短期大学）【司会：高城弘一】
 11：00～11：10 休憩
 ⑦11：10～11：40 「『顏氏家訓』雑芸篇の書に関する記述について」 成田健太郎（東京大学附属図書館）【司会：澤田雅弘】
 ⑧11：40～12：10 「古筆手鑑『かりがね帖』所収「升色紙」とその周辺」 高城弘一（大東文化大学）【司会：森岡隆】
 12：10～12：20 閉会式（3号館 3505教室）
 12：20～ 記念撮影
 特別展示「王朝の物語展」（文理学部資料館）観覧 ※10時～17時開館
 15：00～ 都内美術館・博物館鑑賞会（台東区立書道博物館、出光美術館）

○都内美術館・博物館鑑賞会について

台東区立書道博物館・出光美術館のどちらかの施設で、展示をご鑑賞いただけます。所定の時間になりましたら、各館学芸員が施設概要や企画展内容についてご案内いたします。その後、閉館までごゆっくりご鑑賞ください。入館料は別途必要となりますので、各自でお支払いの上、お時間までにご参集ください。

台東区立書道博物館、および出光美術館の概要については、次頁をご参照ください。

第28回 ('17) 書学書道史学会大会・26日午後の企画「都内美術館・博物館 鑑賞会」会場および展示案内

<p>台東区立書道博物館</p> <p>所在地　〒110-0003 東京都台東区根岸2-10-4</p> <p>電話　03-3872-2645</p> <p>開館時間　9時30分～16時30分（入館は16時まで）</p> <p>休館日　月曜日（月曜が祝日の場合は開館し、翌火曜日に休館）</p> <p>年末年始および展示替期間</p> <p>入館料　一般・大学生 500円（300円）</p> <p>高・中・小学生 250円（150円）</p> <p>※（）内は20名以上の团体料金</p> <p>※障害者手帳をご提示の方及びその介護者は無料</p> <p>H P : http://www.taitocity.net/zaidan/shodou/</p> <p>交通　①JR鶯谷駅北口下車 徒歩5分 ②JR・京成電鉄 日暮里駅南口下車 徒歩10分</p>
<p>出光美術館</p> <p>所在地　〒100-0005 東京都千代田区丸の内3-1-1</p> <p>電話　03-38600（帝劇ビル9階（出光専用エレベーター）</p> <p>開館時間　10時～17時（入館は16時30分まで）</p> <p>休館日　毎週金曜日は19時まで（入館は18時30分まで）</p> <p>入館料　一般 1,000円（800円） 高・大学生 700円（500円）</p> <p>※（）内は20名以上の团体料金</p> <p>※障害者手帳をお持ちの方は200円引、その介護者1名は無料</p>
<p>次回展のご案内</p> <p>特別展「吳昌碩とその時代——苦鐵没後90年——」</p> <p>企画展「あの人、こんな字！——歴史上の人物たち——『中国編』」</p> <p>会期　平成30年1月4日（木）～3月4日（日）展示替えあり</p>
<p>開催中の展覧会</p> <p>企画展「あの人、こんな字！——歴史上の人物たち——『中国編』」</p> <p>会期　平成30年1月22日（金）～12月17日（日）</p>

第28回 ('17) 書学書道史学会大会

発表とその他の連絡事項

○発表者の持ち時間は、30分(発表時間20分、質疑応答10分)です。発表に際しては、時間厳守でお願いします。

○発表者各位においては、発表資料は、A3版両面印刷最大5枚まで（複数枚の場合は綴じること）として250部をご作成いただき、11月22日（水）までに、下記の宛先へ送付をお願いします。

〒156-8550 東京都世田谷区桜上水3-25-40

日本大学文理学部国文学科 鈴木晴彦（鈴木研究室）宛

☎ 03-5317-8758

※送付封筒前面に「書学書道史学会研究発表資料在中」と記載してください。

○発表会場にはプロジェクターが設置されています。ご利用の場合、当日、USBメモリー等をご準備ください。試写は、研究発表前の空き時間を適宜ご活用ください。なお、プロジェクターを使用される方は、資料送付の際に、その旨をお知らせください。

○各発表の司会者は、専門分野を考慮の上、振り当てました。ただし、諸般の事情により、司会者に変更が生じる場合があります。

○理事・監事・諮問委員の方は、11月25日（土）11:00より「第64回定例理事会」を開催いたしますので、理事会開催会場の「3号館 3501教室」へご参集ください。

○幹事の方は、11月25日（土）10:30に「3号館 3502教室」へご参集ください。

企画展「書の流儀II——美の継承と創意」

会期　11月11日（土）～12月17日（日）

開催中の展覧会

企画展「書の流儀II——美の継承と創意」

会期　11月11日（土）～12月17日（日）

交通　①JR線「有楽町」駅 国際フォーラム口より徒歩5分

②東京メトロ有楽町線「有楽町」駅 B3出口より徒歩3分

③東京メトロ日比谷線・千代田線「日比谷」駅 B3出口より徒歩3分

有楽町線方面 地下連絡通路経由 B3出口より徒歩3分

第28回 ('17) 書学書道史学会大会レジュメ【11月25日（土）】①14：40～15：10 発表・高橋佑太／司会・河内利治

①張祖翼『磊盦金石跋尾稿』初探

高橋 佑太

清末民初を代表する文人である呉昌碩、豫園書画善会の初代会長を務めた高邕、そして汪洵らとともに「海上四大家」に数えられるのが、張祖翼（一八四九～一九一七）である。安徽桐城の人であるが、辛亥革命以後は上海に寓し、収蔵家として名高い端方の幕客として迎えられ、その蔵品の鑑定に従事したことでも知られる。実作では、漢隸風の書を善くし、彼が書き下ろした漢碑の臨書手本集『漢碑範』（上海文明書局の石印本）は、幾度も版を重ねており、当時、大衆的な人気があつたことがうかがえる。

近年、張祖翼については、彼の所蔵拓を影印した『張祖翼經典藏拓系列』（重慶出版社、二〇〇九）や桐城市博物館が収蔵する作品を集めた『張祖翼書法集』（安徽美術出版社、二〇一五）が出版される等、徐々に関連資料が公開されつつある。しかし、金石学に精通していたといわれる張祖翼の書学については、漢隸風の書を善くしたということを除いては、資料上の制約があるためか、ほとんど言及されていない。

現行の辞典類の多くは、彼の代表的な書論として『磊盦金石跋尾』を挙げるものがほとんどである。しかしながら、管見の限りでは、当該書は単著や影印本として刊行されておらず、その全容も明らかではない。そのような状況下、上海図書館には彼の自筆稿本である『磊盦金石跋尾稿』一巻が所蔵されており、彼の書学を考えるうえで、非常に重要な書論であると思われる。当該書は、およそ漢代から唐代までの刻石、墓誌銘、造像記などの碑刻を幅広く収録し、また推敲の痕跡も看取できる草稿である。基本的には、考証学的な著録を意識した内容となっているが、なかには個別の碑刻の書法に対する言及や王昶『金石萃編』など他の著録を意識した記述も散見される。

本発表では、上掲のような記述を紹介しながら、『磊盦金石跋尾稿』がいかなる性格をもつた書論であるのか明らかにするとともに、そこからうかがえる張祖翼の書法観についても検討を加えてみたい。

（安田女子大学）

②定武本の諸問題と蘭亭序諸本

高木 義隆

二〇一四年に九州国立博物館での台北國立故宮博物院所蔵「定武蘭亭真本」の日本初公開を機に、定武本を再検討した。そして二〇〇九年に本学会誌で発表させていただいた「陳鑑本と陸繼善本蘭亭序」で使った方法に依って、定武本の位置を推定し、蘭亭序諸本の系統について新しい仮説を提案したい。

・「歐陽詢が臨書／模写した墨跡を、石に刻したのが定武本」という伝説は、南宋初期に提唱され南宋末以降に普及した。また、「五字已損」という用語は翁方綱の異議があるとはい、使用することはできると考える。

・「定武蘭亭真本」と「独孤長老本」二点だけが定武の原拓本で、他は翻刻本という、王壯弘の説に賛成する。ただし、安岐「墨緣彙觀」によると、「定武蘭亭真本」の跋は一度切り離されていった経緯があり、この拓本を対象として書かれた跋であるかどうか疑わしい。

・定武蘭亭序の拓本は、翻刻諸本を含めて殆ど罫線と上下界線を備えている。法帖では例外的だ。また、原石の損傷痕を含めて模写的複製的な翻刻が伝統として行われている。定武蘭亭序の原本に罫線界線があつたのは事実だろうが、蘭亭序の原本にあつたかどうかという疑問を呈する。

・文字間隔に注目した比較方法で定武蘭亭真本と伝世蘭亭序模写本を比較する。これによつて、定武蘭亭真本は張金界奴本及び、ほぼ同一の模写本である陸繼善本（台北故宮）と陳鑑本（北京故宮）に近いということがわかる。これをもとに蘭亭諸本を分類する。

・南宋の御府領字從山本（香港中文大学所蔵）と陳鑑本Ⅱ陸繼善本の損傷部分比較に基づき、陳鑑本と陸繼善本が現存蘭亭序の祖本の直系であるという仮説を呈示する。

第28回 ('17) 書学書道史学会大会レジュメ【11月25日（土）】③15:40~16:10 発表・三井忠大／司会・笠嶋忠幸

③松田南溟が比田井天来へ宛てた書簡にみる古法に関する一考察

三井 忠大

比田井天来は松田南溟とともに新しい書法の研究を行ったことが知られる。天来が古法を悟るきっかけとなつたこの事実に触れた書物はこれまでにも数多い。しかしながら、事実のみの紹介で終わつており、天来と南溟が具体的にいかなる研究を行つたのかについては言及されていない。今回の発表は、二人の共同研究の内容を詳らかにすることを目的とする。

南溟が天来へ宛てた書簡が現存していることから、これを精読し、二人が何を考え、どのように研究の成果を言語化しようとしていたのか、考察したい。

この書簡の存在は、一部の研究者の間では知られていたものの、これまで活字化されておらず、一人歩きしていた感の強い天来と南溟との書法研究の内容をはじめて具体的に示すことができると考える。

「みかんの皮をむく動作」に似ていると述べている。そして穂先全ての角度が均等に使われ、中鋒の状態になつていることこそが俯仰を実践する要との結論を出した。中鋒の理念は八面出鋒と同義であり、筆の穂先を全方向使いこなすことが要であるという。さらにこの書簡には、二人が目を通したであろう書論や法帖に関する記述も見られる。

天来は、正確な臨書を行うためにどのような筆法が好ましいかという課題に直面し、南溟との共同研究を経て、新たな書の境地を開拓した。自己の道を切り開くために必須の学書方法は、多様な臨書であることを見れば確信した。天来が日下部鳴鶴から引き受けて実践していた筆管を固定する廻腕法と違い、自在に筆管を動かす古法は、天来が『学書筌諦』などで示した多種多様の碑版法帖に対応するにふさわしい。今回の発表では、天来が共同研究に至るまでの過程を整理した上で、南溟が天来へ宛てた書簡を中心に天来の古法に関する見解を論じることにしたい。

(大東文化大学大学院生)

④唐代の碑誌にみる複数書体の混用

剣持 翔伍

碑や墓誌銘（以下「碑誌」とする）の登場以後、それらは書法を伝える主要なメディアとなつた。従来碑誌には正式書体が用いられたが、初唐にになり、行書が碑誌に用いられたことは特筆すべき事象である。八世紀半ばころには篆・隸書の碑誌も多く見られるようになり、その流行が窺い知れる。

そんな唐代の碑誌は、伝統的な碑誌と同様、篆書を中心とする「題額・蓋」を備え、「碑身・誌石」は題款と本文が一つの書体で記される。しかしながら、唐代の碑誌をつぶさに見てゆくと、既述の形式の書体の用い方とは異なる、注目すべき書体の使用が看取された。それは盛唐期のはじまりとほぼ同時に現れ始めた、碑誌の碑身・誌石の書の一部が他の書体を混用して書き分けられたものである。本発表ではそれを「複数書体の混用」として定める。そして、それら書体の混用はどのように類型化できるか、それはどのような意味を持つ現象であり、唐代書法史においてどのように位置づけられるのか、を明らかにする。

調査の結果、複数書体の混用に三つの類型が認められた。これらの類型において、本文の書体と混用する書体の組み合わせに規則性が存在しており、それにより当時において書体の書き分け意識がある程度定着していたことが明らかとなつた。混用の目的としては、その部分を強調する意識があつたと推察される。

複数書体の混用は、当時における書体の嗜好性の多様化に伴う、その一端の発露として捉えられる。加えて、上述のように、碑誌の一部分を強調するために異なる書体を使用していたこと、さらに言えばその混用の仕方に規則性が存在していたということは、書体の役割・効果に対する明瞭な書体の書き分け意識があつたことを示す証左となろう。書法史的視点から見ると、従来の楷・行書の重視という伝統的認識からの変化であり、盛唐期は書体認識の転換期として位置づけられるのではないかろうか。

(筑波大学大学院生)

第28回 ('17) 書学書道史学会大会レジュメ【11月26日(日)】⑤10:00~10:30 発表・関俊史／司会・菅野智明

⑤庚肩吾『書品』における評価方法の淵源

関 俊史

古代中国における書の評論方法の一つに品第法がある。その嚆矢となるのが梁・庚肩吾の『書品』である。庚肩吾は字を子慎といい、官は梁の元帝の時に度支尚書に至っている。『梁書』には、卷四十九文学伝、於陵付伝として庚肩吾の伝が存在するが、その内容は簡文帝の即位以前より文学サロンに参加していたという文章表現者の側面を記しただけのものであり、『書品』についての記述は見られない。

『書品』は、古今の書人百二十三人を取り上げて九等に評定したものである。こうした手法は庚肩吾以前に、『漢書』古今人評や南齊・謝赫の『古画品録』にも見られ、庚肩吾の独創によるものではない。しかし、庚肩吾はその品第を決定する際に一貫して「天然」と「工夫」を基盤とした評価基準を用いている点には独自性がある。

かかる『書品』の先行研究は、庚肩吾が九等に評定する思想や「天然」と「工夫」といった評語解釈が主となっている。就中、庚肩吾が九等に評定したことについては中田勇次郎や興膳宏などが当時の官僚登用制度であった「九品中正制度」にその影響を見るが、渡邊義浩はその『詩品』や『書品』における品第は「九品中正制度」のみに淵源を持たず、「性三品説」を根底に据えていると述べる。また「天然」と「工夫」についても、中田勇次郎は「天然」とは人間の技巧によらず情性が自然と表出したもの、「工夫」とは人間の努力によつてなされる技巧である、という。したがつて白川義郎も指摘するように、『書品』の思想には、こうした性と、技巧という相対的な概念が存在している。こうした人間の先天性、後天性を評価方法として用いる議論において想起せられるのは、魏晉期に流行した才性論である。

本報告では『書品』の思想が先行研究で指摘されているように「九品中正制度」と「性三品説」を有するとするならば、「天然」と「工夫」という評価規準は才性論と関連を有するのではないかという可能性について、庚肩吾が置かれた梁代の思想空間とともに検討することを目的としている。

(早稲田大学大学院生)

⑥十三世紀書写の真觀本の特徴と装飾料紙

中村 健太郎

鎌倉時代中期に、反御子左派の歌壇グループを形成した真觀（葉室光俊・一二〇三一一七六）については、和歌文学・和歌史研究において、おもに検討がなされた人物である。従来の日本書道史研究では、検討の対象として取り上げられる機会が少ない人物でもある。書道史における先行研究としては、西本願寺が所蔵する国宝『三十六人家集』のうち『躬恒集』を鎌倉時代に転写した事績について言及があるものの、その筆跡や書道史上の位置付けは皆無といえる状況である。かつて発表者は、「真觀本の特徴を持つ古筆切資料について」と題した発表（和歌文学会関東例会、二〇一二）を実施し、その後も和歌文学研究を中心に、田中登氏「真觀の書写活動」（和歌文学会関西例会、二〇一四）をはじめ、具体的な検討が進展している。こうした現状において、書道史研究の視点から、あらためて現時点での検討結果を報告するものである。

冷泉家時雨亭文庫が所蔵する、冷泉家伝來の真觀書写本および真觀監督書写本（これらを本発表では真觀本と総称する）の存在は、鎌倉時代の装飾料紙や、真觀による写本作成の基準となる重要な資料群であり、今後の書道史研究における位置付けが必要不可欠なものと考える。こうした問題意識を始発点とし、鎌倉時代の和歌史・書道史研究の両視点から、真觀の歌壇活動と密接に関わる書写活動について確認を行う。すなわち、同時代の書道史研究では、仮名書跡は後京極流や弘誓院流、世尊寺流など特定の流派の影響が顕著であり、その後の流儀書道全盛の起点と理解されている。一方、真觀の筆跡は、同時代の流行書風とは大きく異なる特徴を持つ。具体的には、十二世紀（平安時代後期、院政期）の一部の仮名古筆に共通するような書風が随所に看取できる点である。現存する真觀本の特徴と、十二世紀書写と推定されてきた一部の仮名古筆資料の類似は、これまでの推定書写年代の再検討に直結する問題であり、書道史研究においても重要な研究対象と考える。

このよう、十三世紀における真觀の特異な書風選択と、同時代の装飾料紙の特徴から、鎌倉時代における平安時代後期の仮名書風の復古意識について明らかにしたい。

(帝京大学短期大学)

第28回 ('17) 書学書道史学会大会レジュメ【11月26日(日)】⑦11:10~11:40 発表・成田健太郎／司会・澤田雅弘

⑦『顏氏家訓』雑芸篇の書に関する記述について

成田 健太郎

顔之推（五三一一五九一頃）の著作『顏氏家訓』の「雜芸第十九」は、書、画、射、ト筮、算術、医術、琴、盤上遊戯、投壺の各種技芸について述べる一篇だが、そのなかでも第一に置かれ、かつ分量も最も多いのが、書に関する記述である。本発表では、これら一連の書に関する記述を分析し、顔之推の学問・思想の特徴と関連づけて理解すると同時に、それを南北朝後期から隋初にかけての書文化の流れの上に位置づけるべく模索したい。

顔之推は、その前半生を南朝の梁で過ごしたが、五五四年、梁元帝の江陵政権を滅ぼした西魏の軍に連行され、そのまま北朝・隋で後半生を送った。隋唐統一王朝に連なる北朝の軍事的優勢と南朝貴族社会の破局を目の当たりにした顔之推の証言は、この時期の書の趨勢をうかがう重要な手がかりになるだろう。もとより顔之推は書の専門家ではなく、その知見に限界はあるだろうが、唐・張彦遠『法書要錄』によつて伝えられる書論を見ても、北朝のものはもとより少なく、さらに南朝もほとんど梁武帝朝以前のものである。つまり、書学理論著作とはいえないにせよ、『顏氏家訓』は梁末・陳隋の書に関する文献の空白を埋めるピースとなる可能性がある。

顔之推は、南北両地の社会に深い洞察を加えており、北朝社会への違和感と南への愛着をのぞかせつつも、南朝貴族社会のあり方には厳しい目を向けている。書についていえば、二王以来の書の伝統を強く意識しつつ、南朝におけるその展開を批判的に回顧しており、梁武帝朝の庾肩吾「書品」に代表されるような貴族的価値観とは完全に異なつてゐることが見て取れる。書文化に対する厳しい見方は、土地と時代の相異に由来するのか、顔之推の学者としての個性に由来するのか、注意深く分析するとともに、法書をはじめとする当時の書に関するメディアの実態にも留意して考察したい。

(東京大学附属図書館)

⑧古筆手鑑『かりがね帖』所収「升色紙」とその周辺

高城 弘一

古筆手鑑『かりがね帖』(重要文化財、文化庁蔵)には、伝紀貫之筆「高野切第一種」をはじめ、平安時代から鎌倉時代にかけて書かれた古筆切の名品が二十八葉押されている。発表者はかつて、『かりがね帖』所収の伝小野道風筆「小島切」や伝小大君筆「香紙切」に興味を持ち、全体を熟覧する機会を得た。本発表では、『かりがね帖』所収の伝藤原行成筆「升色紙」に焦点を当て、さまざまな角度から考察し、その周辺的なものにも言及したいと思う。

この「升色紙」には、書き出し「き(支)」およびそれに伴う合点の一部、四行目「も(毛)」、返し書き行頭「み(三)ち」などは、本紙が傷んでいるにも関わらず、補紙にこれらの文字が存在する。したがつて、これらは後世の補写によるものであろう。「升色紙」書写当時、本当に、これらの本文となつていたのであろうか。

江戸中期の近衛家熙(予楽院)は、さまざま古筆を臨摸している。今般、「升色紙」の散逸や改変される前の形を写し留めている予楽院臨摸「升色紙」二葉(新出、八首および六首、計十四首分)を確認した。まさに、『かりがね帖』所収「升色紙」写し部も含むが、現状とは異なる点多いことが判明した。

また、『かりがね帖』所収「升色紙」には、向い合せの頁の書が写つた鏡文字「か(可)」は(者)き(支)り(利)の」を有するが、現存の「升色紙」にはその書き出しの一葉を確認できない。しかしながら、先述の予楽院臨摸「升色紙」には、「かりがね帖」所収「升色紙」写しの右隣に、「か(可)」は(者)き(支)り(利)の」ではじまる一面二首が確認できる。ささらに、『深養父集』を写した伝紀貫之筆「名家家集切」および「升色紙」以外、平安時代の書写にかかる唯一の断簡と喧伝される伝紀貫之筆「深養父集切」は、現物を熟覧する機会を得たが、「か(可)」は(者)き(支)り(利)の」ではじまる一面二首の「升色紙」写しであること

(大東文化大学)